第4回 忘れられない看護エピソード
内館牧子賞
一般部門

身をもって…

【田中（たなか） 由美（ゆみ）・福岡県】

「娘から、尻に指を突っ込まれた～!!」

主人が笑顔でそう語った言葉は永遠に笑い話として語り継がれることであろう。

末期の大腸がんだった。主人は少しでも自宅で家族と過ごしたいと願ったので、在宅医療をすることに決めた。往診の先生、訪問看護師さんの協力の下、主人はつらくて幸せな時間を過ごすこととなった。

何より心強かったのはわが家の新米看護師さんの存在である。長女は看護学科の1年生。まだまだ勉強を始めたばかりで看護について何の知識もなかった。それでも自分の血圧計で父親の血圧を測り、顔色を見る。そして訪問看護師さんへの報告が日課となった。

ある日、往診の先生が来られた時のことである。主人はお尻の痛みを訴えた。直腸の入り口に腫瘍ができているために痛いらしい。娘が看護師を目指していると知っていた先生は触診をされ、「ほら!!　あなたもゴム手袋をつけて!!　人差し指を入れて、時計回りに3時から6時。6時から9時の方向に回してみて。そこに固いところがあるでしょう？　それが腫瘍です」と説明した。びっくりしたのは娘と私。そして何より主人本人である。後に、お見舞いに来てくれた親戚や友人にうれしそうに語っていたその笑顔を今でも忘れられない。

この数カ月、娘は学校や病院実習でもできないような貴重な体験をさせてもらった。きっと主人は身をもって学ばせてくれたのだろう。父親の死を無駄にしないためにも、娘は素晴らしい看護師さんになってくれると信じている。

私は主人が生きた証をここに残したい。そして伝えたい言葉がある。

「今までありがとう。これからもずっと一緒だよ。見守っててね」。